

## 在天会員記念礼拝説教 「天と地を結ぶ備えを」

日本基督教団石神井教会 2017年10月22日

### 【使徒書日課】ヨハネの黙示録 7章9～17節

<sup>9</sup>この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、<sup>10</sup>大声でこう叫んだ。

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」

<sup>11</sup>また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、<sup>12</sup>こう言った。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、

誉れ、力、威力が、

世々限りなくわたしたちの神にありますように、

アーメン。」

<sup>13</sup>すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」<sup>14</sup>そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」

<sup>15</sup>それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、昼も夜もその神殿で神に仕える。

玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。

<sup>16</sup>彼らは、もはや飢えることも渇くこともなく、

太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。

<sup>17</sup>玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

### 【福音書日課】マタイによる福音書 25章1～13節

<sup>1</sup>「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。<sup>2</sup>そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。<sup>3</sup>愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。<sup>4</sup>賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。<sup>5</sup>ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。<sup>6</sup>真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声が出た。<sup>7</sup>そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。<sup>8</sup>愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』<sup>9</sup>賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』<sup>10</sup>愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。<sup>11</sup>その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。<sup>12</sup>しかし主人は、『はつきり言うておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。<sup>13</sup>だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

## 白い衣の大群衆

年に一度の「在天会員記念礼拝」にお集まりの皆さんに、一年ぶりに更新した「在天会員・教会墓地埋葬者名簿」をお届けいたしました。「在天会員」として名が記されている方が 99 名、それ以外の教会墓地に埋葬されている方を合わせると 112 名の名が記されています。昨年「在天会員記念礼拝」以後、一年の間に 5 名の方のお名前が加えられています。この名簿をご覧になられて、そこに懐かしいお名前を見つけられ、生前の面影を思い起こされていらっしゃるのではないでしょうか。もちろん、この中に名が記されている方のご家族として、今日、この記念礼拝を特に憶えておいでくださった方も、少なくないはずです。

石神井教会の 60 年になろうとしている歴史を振り返るならば、これだけの方を故人として記念するのも、当然のことかもしれません。この名簿は、毎年新しい名が加えられて人数が増すことはあっても、減ることはないのです。天にお送りして 50 年過ぎたから、もう記念をしなくてもよい、というようにはならないのです。この教会が続く限り、この名簿は、どこまでも数を増して、幾ページにもわたって記されなければいけないものになっていくでしょう。

そのようにするのは、わたしたちが、故人のために何か記念をし続けなければ、故人に困ったことが起こるから、ではありません。あるいは、そうしなければわたしたち自身に何か困ったことが起こるから、というのでもありません。聖書には、天の神のもとに「命の書」と呼ばれるものが置かれていて、そこにわたしたちの名が記されてる、と教えられています。天地を創られ、わたしたちすべてに命をお授けくださった神が、一人ひとりの名を覚え、永遠に命のうちに数えていてくださるのです。わたしたちが、地上の教会にあって、亡き故人の名簿を作り、その名を憶えるのは、天にある神が「命の書」に一人ひとりの名を記し、お憶えくださっていることを、心に留めるためなのです。

「ヨハネの黙示録」には、天上の神の玉座近くに、おびたしい数えきれないほどの白い衣を着た大群衆が集まってきている様子が描かれていました。これは、ヨハネという弟子が、まだ地上に生きていたとき、日曜日の礼拝を、本当にごく少人数で守っていて、幻のうちに見させられたことを、書き留めたものです。そのとき、ヨハネは、囚われの身でした。命の危険にもさらされていました。しかも、信仰の仲間が大勢周りにいて、励まし合っていた、というのでもないのです。ほとんど孤立無援状態でしたが、離れた地の教会で同じ日曜日に礼拝が守られていることを思い起こしながら、礼拝をささげていたのです。

ヨハネは、幻のうちに見ました。地上で少なからぬ苦しみを背負いながら、涙を流しながら生涯を終えた多くの人々が、キリストの光で照らされた白い衣に身を包んで、神のもとに招き集められているのです。地上の人生がいかなるものであっても、神は、その一人ひとりの名を覚え、命の水の泉へと導いてくださる。

ヨハネの見た幻は、何とも壮大なスケールのもので、**あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった…大群衆!**。そこには、何の分け隔ても、差別も排除もない。それが、キリストの神の御心なのです。

## その日、その時を知らない

今、わたしは、皆さんにお届けした「名簿」に大幅な加筆をしなければいけないのではないかという思いを持っています。ここに名を記されていない、この人たちの家族の名。ここにお集まりくださっている皆さんがお憶えくださっているご家族の名。そればかりか、ここにいる皆さんの名をも。

皆さんはもちろん、皆さんのご家族も、まだご健在かもしれません。けれども、わたしたちは、本当は、地上に生きているときにすでに、天上の「命の書」に名を記されているはずなのです。神がわたしたちをお造りくださり、命をお与えくださったのであれば、地上の生涯を生きる間も、当然、その名をお憶えくださっているでしょう。そのことを、イエス・キリストを通して確信するに至った者は、洗礼にあずかり、地上の教会の名簿に加えられてきました。その地上の教会の名簿と「在天会員名簿」とは、別物ではないのです。一つの名簿の「地上の部」と「天上の部」なのです。洗礼を受けたキリスト信者というのは、天上の「命の書」に名が記されていることを信じて、地上の教会の「命の書」にも名を連ね、この神の御心を証しつつ生きる者だと言ってもよいのです。

皆さんのお手元の「名簿」に名が記されていない多くの方々のことを、今、皆さんには想い起していただきたいと思います。ここに名が記されている方々と共に、合わせて記念していただきたいのです。その一人ひとりを、命の源である神がお憶えくださり、その名を呼んでくださっています。わたしたちもまた、いずれ、この「名簿」に名が記されるときが来るのです。天上の白い衣を着た群衆に加えられる日が訪れるでしょう。もちろん、その日、その時がいつやってくるのか、わたしたちには分からないのですが。

マタイ福音書には、「十人のおとめのたとえ」が語られていました。「賢いおとめと愚かなおとめのたとえ」とも呼ばれる、主イエスのお語りになられた有名なたとえです。「終末」についての教えとして語られたと言われますが、教会の歴史の中では、一人ひとりの人生の終わりをどう迎えるかということを考えさせるたとえとしても聞かれてきました。

このたとえを元にして作られた有名な讃美歌に「目覚めよと呼ぶ声あり」（讃美歌 21 - 230「起きよと呼ぶ声」）というものがあります。16世紀末、フィリップ・ニコライというルター派の牧師が、ペストの大流行している最中に作詞作曲した讃美歌です。ニコライ牧師は、ペストで倒れていく町の人たちのために毎日十数件も葬儀を執り行わなければならない中で、この讃美歌を作ったと伝えられています。「目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」という御言葉を心に刻みながら、死が間近に迫ってきていた人々は、こう思い描いたのではないのでしょうか。「その日、その時には、備えて信仰に生き、そして死んだ者を、花婿である主イエスが天の婚宴の席へと連れて行ったださる」。そのような望みを抱きながら、次々に死んでいく家族や周囲の人々を葬り、また自分自身の死のときをも迎えたのではないのでしょうか。それは、きっと、多くの人にとって慰めとなったことでしょう。

## たとえ眠り込んでいても

けれども、わたしは、今日ここで、皆さんに、「だから、信仰をしっかり保って生涯を歩み抜きましょう」と呼びかけるつもりなのでは、ないのです。多くの信仰の先達の中から、立派な模範的な一人を取り上げて、「さあ、わたしたちも、そのように続こうではありませんか」と申し上げたいのでは、ないのです。このたとえから、天の御父なる神の御心を、ご一緒に聞き取っていただきたいのです。

ここに描かれているおとめたちは、一つの大切なことに備えて待っています。花婿が花嫁を迎えに来る、そのときに花嫁に付き添って共に婚宴会場に行くために、備えて待っているのです。おとめたちは、自分が主役の花嫁なわけではありませんが、花嫁の付き添いとして婚宴会場に入ることができるのです。実際、半分の五人のおとめは、花婿が迎えに来たときに、すぐに出迎えて、婚宴会場に向かうことができました。ところが、残りの五人のおとめは、出迎えることができず、婚宴会場に入ることができなかつた、というのです。

あらかじめともし火の油の用意もしっかりしていた賢いおとめ。油の用意ができていなくて、あわてて買い求めに行った愚かなおとめ。このような対比を見せられると、夏休みの終わりに宿題をやり残してしまった経験のある者には、絶望的な思いしか与えられません。先を見越して、計画的に事を進められる賢い者になりたいと思っても、なかなか、そうはなれないのです。

たしかに、この賢いおとめがしっかりと用意していた「油」を、わたしたちが人生のうちで備え用意すべきものとして理解するように教える先達がありました。この「油」は、洗礼を受けることを指しているとか、愛の行いのことだとか、あるいは聖霊のことだと理解され、それを求めるように勧められてきたのです。

けれども、このたとえの要諦は、そこにあるのでしょうか。

このおとめたちは皆、花婿が花嫁を迎えに来るのを待ちきれず、一人残らず**眠気がさして眠り込んでしまった**と、主イエスはお語りになりました。主イエスは前後で「**目を覚ましていなさい**」と繰り返されているのに、です。

「眠り」は、わたしたちが休息を得るためばかりではありません。「眠り」は、わたしたちが自分の頭で考え、自分の足で進み、自分の手で何かを為すということを抑えることです。それは、わたしたちを超えた力が働くときです。そのときにこそ、花婿が迎えに来るのです。その時の訪れを待つために、眠ることが必要なときもあるのです。眠っていたおとめたちを分けたのは、花婿の迎えに応じたかどうか、この違いです。賢いおとめは、すぐに迎えに応じました。眠っていたけれども、目覚めていたのです。愚かなおとめは、自分の油を用意しなければと思い、すぐに応じなかつたのです。せっかく花婿が来たのに、せっかく大きな力、神の御業が始まったのに、愚かなおとめは、自分の力でどうにかしようと右往左往し出してしまった。眠っていたのに、眠りの意味に目覚めていなかったのです。

皆さん、今ここで、このおとめたちのように眠り込みましょう。目覚めているために眠るのです。目覚めて、自分の思いを眠らせ、手の働きを眠らせるのです。その日その時に、大いなる御力の訪れに従うことができるように、と。